オペラ『白狐』（全３幕／日本語版）　翻訳・台本・作曲：平井秀明　原作：岡倉覚三（天心）”The White Fox”

■作品解説：

日本近代美術の父と称される岡倉天心が 1913 年にボストンで執筆した絶筆の英語オペラ台本“The White Fox”を、没後 100 年・生誕 150 年に当たる 2013 年 12 月 1 日、“妙高市文化ホール 30 周年記念事業（公益財団法人妙高文化振興事業団委嘱作品）”として、平井秀明が翻訳・台本・作曲／指揮を務め、日本語版世界初演が行われた。「白狐」の原作である英語台本を天心が完成し、作曲者（レフラー）も決定したが、結局、生涯作曲されることは無く、“幻のオペラ”とされてきた。その後、2007 年に東京藝術大学創立 120 周年記念企画として、ボストン在住の作曲家戸口純の作曲により部分的に作曲され、英語上演が行われたが、日本語での全幕通じての作曲は平井秀明が初めて成し遂げ、妙高市での上演が≪日本語版世界初演≫となる。

天心のオリジナル英語台本の表紙には「音楽のために書かれた三幕の妖精劇」とあるように、原作は人形浄瑠璃や歌舞伎で有名な「信太妻伝説」に基づく、阿倍野の国守“保名”と彼に助けられた白狐“コルハ”の物語である。美しいメロディーやドラマティックな音楽に満ちた作品は聴衆を魅了し、特に第３幕の悲劇的なエンディングでは涙を誘い、2014 年 3 月、妙高市での小規模ハイライト再演に続き、同年 11 月、2015 年 11 月と、同市にてハイライト版再演が行われた。

2016 年 9 月には、「国際天心シンポジウム」（北茨城市五浦）のトリを飾るイベントとしての茨城初演（ハイライト版）、同年 11 月には、東京初演（全幕・演奏会形式）が行われ、各種メディアにも掲載され大きな話題となった。また、同年 7 月、オペラ『白狐』を歌い継ぎたい有志約 60 名により妙高白狐倶楽部合唱団が新潟県妙高市にて結成され、上述の茨城県、東京公演への出演のほか、毎年 9 月 2 日の岡倉天心忌法要では赤倉高原の六角堂前での演奏を行うなど、作品普及活動を精力的に行っている。さらに、2019 年 6 月、ニューヨーク祝祭管弦楽団定期演奏会、およびニューヨーク総領事公邸でのプレビューイベントは現地の芸術関係者から絶賛された。

同年 11 月、天皇陛下御即位記念【第 34 回国民文化祭・にいがた 2019】のメイン事業として妙高市にて行われた全幕再演は完売となる成功を収め、2020 年 4 月には、ニューヨーク公演（米国初演）が決定したが、突然のコロナ禍により中止を余儀なくされたが、ニューヨークの音楽愛好家らの熱望に応えるべく、岡倉天心の 112 年越しの夢実現にあたる延期公演が、2025 年 5 月、ニューヨークの殿堂マーキンホールにて遂に実現し、大きな成功を収めた。

■あらすじ：

＜第１幕＞

阿倍野の国守・保名の許婚である姫・葛の葉を恋慕う魔導師・悪右衛門(あっけいもん)は、白狐コルハの持つ魔法の宝玉の力により葛の葉を我が物にしようと企み、狩人たち、猟犬、鷹を引き連れて狩りへと向かう**（男声合唱「狩人の合唱」）**。悪右衛門がコルハを矢で射とめ**（アリア「コルハの宝玉」）**、宝玉を奪おうとするところで保名が現れ、悪右衛門も思いを寄せる葛の葉の誕生日に殺生は慎むようにと諭され、止む無く断念して逃げ去る。保名は、九死に一生を得たコルハに宝玉を返し、「仏の慈悲を信じ、善行を積み、より高い転生を求めよ」と言い聞かせる**（小アリア「より高き化身を」）**。

やがて、葛の葉の侍女たちが、姫様の誕生日の祝宴を飾るため、草花を摘みに集まって来る**（女声合唱「愛の霧の中へ」）**。そこへ保名が登場し、葛の葉への愛を歌い**（アリア「崇高な光が、世界を満たし」）**、葛の葉が保名へ愛の歌を返し**（アリア「あなたの愛に、魂は目覚め」）**、互いに愛をささやき、二人は幸せなひとときに浸る**（二重唱「愛のやすらぎ」）**。

保名と葛の葉が愛を語らっていると、慌てふためく葛の葉の侍女たちが、悪右衛門により保名の城に火が放たれたことを告げ、保名たちは逃げようとするが、瞬く間に悪右衛門の軍勢に囲まれてしまう。応戦の甲斐無く保名は傷を負い、葛の葉は悪右衛門に連れ去られ、保名の手の中には、葛の葉の袖だけが残る**（フィナーレ「降伏せよ」）**。

＜第２幕＞

童たちが登場し、こぎつねごっこをして遊び（**児童合唱「こぎつねさんのごあいさつ」**※このシーンは岡倉天心の原作にはなく、平井秀明氏により創作されたものです。）、続いて狐の妖精たちが狐の女王コルハの目覚めを待ち、湖畔にて歌い踊る**（女声合唱「妖精たちの朝」）**。妖精たちが去った後にコルハが登場し、葛の葉を奪われ自らも負傷し、悲嘆の中、森を彷徨い歩く保名の恩に報いるため、自らを葛の葉の姿に変身させてほしいと、月に懇願する**（アリア「月の歌」）**。

葛の葉に変身したコルハの前に現れた保名は、コルハを葛の葉と信じ込み、コルハに案内され隠れ家へと向かう**（二重唱「麗らかなあやめよ」）**。一方、悪右衛門とその兵士たちは、葛の葉に飲ませる愛の媚薬を作るため薬草を集めている。狐の妖精たちと共に戻ったコルハは、彼らに身を任すふりをして酒宴で歓待する**（混声合唱「酒宴のとき」）**。しかし、酔いが回った頃、悪右衛門と兵士たちは、魅惑的な女たちに断崖へと誘い出され、湖水に転落し、復讐劇が繰り広げられる**（フィナーレ「コルハの復讐」）**。

＜第３幕＞

観音堂の丘に建つ隠れ家で、コルハが機を織りながら赤ん坊に子守唄を歌っているところへ**（アリア「眠れあかごよ」～コルハの子守唄～）**、巡礼の一行が現われ、施しを乞うてくる**（混声合唱「巡礼の祈り」）**。コルハは施しを与え、巡礼の訳を尋ねると、その一行は葛の葉の従者であり、保名の帰りを祈り、寺から寺へと巡ってきたことを明かす。さらに、今日こそが最後の三十三番目のお寺に向かうところであり、望みの消えた葛の葉は、明日尼になる覚悟であると聞かされ驚く。

巡礼たちが去り、そこへ戻った保名へ、コルハは苦しい気持ちを抑えて、その寺に居る女子(おなご)に会いに行き、お守りと告げて渡すようにと、自分の袖を引き裂き、保名へ渡す。気が進まない保名は、コルハの重々しい言葉に驚き、渋々寺へと向かう**（レチタティーヴォ「保名との別れ」）**。

コルハは偽りの葛の葉の姿となり、保名と過ごした事への懺悔と、我が子への惜別の気持ちを独白し、我が子に魔法の宝玉を与えると、次第に魔力が衰え、コルハは狐の姿に戻り始める。書き置きを残そうとするが、コルハの手は狐の前足に変わり筆を持つことすら叶わず、口に咥えた筆で、懸命に壁に書き残そうとする。巡礼たちの歌声が近づき、コルハは窓を飛び出し、森の中へと戻って行く。不可思議な出来事で狐につままれた思いの保名は、葛の葉と巡礼たちと共に隠れ家へと戻り、壁の書き置きを読み、恩人の正体は保名がかつて助けた白狐だと悟り、余りの衝撃にひざまずき、祈りを捧げる。葛の葉はコルハの愛の犠牲に応えて子どもを抱き上げ、悲しみの中、幕が下りる**（フィナーレ「コルハの残した心」）**。